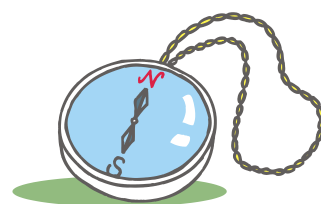


# 羅 針 盤

第 16 号

令和6年10月7日（月）



## ◆ 身だしなみの乱れによる「負け」

今を去ること23年も前の話となりますが、2001年に、サッカーの17歳以下の日本代表チームがヨーロッパに遠征試合に出かけていたときの出来事です。日本代表チームを率いていたのは、田嶋幸三監督です。日本代表チームの選手たちは、ドイツやフランス、イタリアなどの外国の代表チームの選手たちと同じホテルに宿泊していました。田嶋監督が朝食を食べるために食堂にやってきたところ、すでに他国の選手や監督たちは朝食を食べているところでした。どの国の選手も田嶋監督を見かけると、笑顔で挨拶をしてくれたそうです。少し時間がたってから日本の選手たちも食堂にやってきました。ここで、田嶋監督は他国の選手と日本の選手の違いにとっても驚いたそうです。何が違っていたのか。それは、他国の選手と日本の選手の身だしなみの違いでした。他国の選手たちは、誰もが皆、食堂に朝食を食べに来た時には、寝癖を直し、髪の毛を整えていました。また、いつでもすぐに出発できるようにチーム毎に全員がお揃いのシャツを着て、上着の裾はきちんとズボンの中にしまっていました。また、当然のことですが、スリッパなどの屋内シューズではなくきちんと靴を履いてきていました。一方、日本の選手たちはどうであったかと言えば、髪の毛はボサボサの寝癖がついたままで、靴ではなくスリッパを履いていました。また、大半の選手がいわゆるラフな部屋着のような服装で、挨拶も軽く会釈する程度で全く覇気（はき）といったものが感じられなかったそうです。この様子を見た瞬間に、田嶋監督は、試合が始まる前にすでに「勝負あったな」と感じられたそうです。身だしなみの面で負けているようなチームは試合で勝てるわけがないだろうと。実際の試合でも、日本チームは大差で負けてしまったそうです。この経験を基にして、田嶋監督は身だしなみについても、日本代表チームの選手たちに厳しく言うようになりました。身だしなみが良くないということは、気持ちが乱れている証拠であると考えたからです。その結果、身だしなみを日頃から整えることで、気持ちも整い、練習の質もあがって、日本代表チームは強くなっていったそうです。日頃から、意識を高めておくこと、ある一定の緊張感を持ちながら生活をしているということが選手一人ひとりに大きな影響を与えたということです。日頃から気を抜いた状態の生活態度が続いてしまうと、そのこと自体が当たり前のこととなってしまう、力を発揮することができなくなってしまう。自ずとそのことから導き出される結果は明らかであるということに、田嶋監督は気づいて選手の意識改革からまずは始めたということです。生徒の皆さんにとっては、学校という日常の生活を過ごす場で、制服をきちんと着こ



なすことができているかということ。身だしなみを整えることで、学校生活がより充実したものへとになっていくはずです。服装を整えることが、規則だからという理由だけではなく、自らが所属している集団（学校や学年、学級）のためになる行動であるという認識をしっかりと持ってもらいたいと思います。本校の校訓である「時を守り、場を清め、礼を正す」ということも、まずは、自らの「身だしなみ」をきちんと整えているかどうかといったことに、大きく左右されることであるはず。「身だしなみ」を整えておくといった意識を、生徒の皆さんにも日頃から持っておいてもらいたいものです。